

京都大学	博士（地域研究）	氏名	竹田 敏之
論文題目	現代アラビア語の成立とアラブ世界の形成 —文法改革と現代標準語の普及を中心に—		
(論文内容の要旨)			
本論文は、中東地域研究の対象として「アラブ世界」を取り上げ、社会言語の解析という新しい観点を加えて、現代アラビア語の生成と現代アラブ世界の形成について社会的・政治的に相互に関連づけながら考察しようとするものである。 序章では、論文全体の趣旨と方法論などについて概観するとともに、「アラビア語」とは何かについて、言語学および文法学でのこれまでの研究成果をまとめ、本論文で言う「現代標準語」が何にあたるかを明示している。 第1章では、「アラブ世界」を構成するものが何かについて、アラブ知識人たちの認識および先行研究における議論を、アラビア語を共有するアラブ民族がそれに相当するという論、アラビア語を国語または公用語とする諸国の総和がそれに相当するという論をあげ、両者がアラビア語を静態的にとらえ、アラビア語の内容を自明視している点を批判し、現代アラビア語が歴史的に形成されてきたことを捕捉することの重要性を論じている。また、その観点から、近現代のアラビア語とアラブ世界の形成過程を考察するための作業仮説として、5つの時代区分を提示している。 第2章では、19世紀のナフダ（文芸復興）以降のアラブ地域における文化・社会的な変容を、イスラーム世界の普遍的共通語としてのアラビア語から民族語としてのアラビア語への転換、アラブ民族意識の発展、現代アラビア語の文法的な変化などと結びつけながら、各国の憲法に「国語／公用語」と規定されていく歴史的過程を明らかにしている。 第3章では、アラビア語の最大の特徴とされるイウラーブ（語末の母音変化）をめぐる議論が、文法改革の流れの中でどのように展開したのかを、きわめて実証的に論じ、それが学校教育の普及、識字率の向上などによる社会的ニーズと直結して展開していたことを論究している。現在のイウラーブ論は、そのような社会の変化を反映したものであり、単なる文法問題として理解することは適切ではない。 第4章では、アラビア語文法学において大きな役割を担ってきたエジプトを取上げ、エジプトの文部省を舞台とした文法改革、国民教育の広がりや学校文法の成立、エジプト人の国語意識の変容を跡づけている。 第5章では、アラビア文字に着目し、古典的な正書法と近現代における正書法改革の展開、文字改革論の趨勢、それらの過程における各国のアラビア語アカデミーの役割について、アルファベットの中でも表記法に大きな差異が存在する「ハムザ」の正書法を具体例として、詳細に論じている。正書法改革の結果、アラブ世界共通の正書法が普及する反面、ハムザについては地域差が生じており、それがなぜ生じたかが			

1950 年代から 80 年代に至る間のアラブ世界の政治的・社会的な変容と関連づけて論じられている。

第 6 章では、アラビア語が現代化する上で避けて通れない現代諸科学の用語の創出をめぐって、ナハト（2 語の合成）のよる外来語の導入と、イシュティカーク（アラビア語語根からの派生語の生成）による外来の概念の導入という二つの方法をめぐって、19 世紀から 20 世紀にかけて、さまざまな試行および議論がおこなわれたことが、具体的な語彙の検証を含めて、明らかにされている。

結論では、以上の論証を元に、第一章で示された時代区分の仮説をアラビア語に即して修正することで、現代標準アラビア語の歴史的な生成が区分しうることが示された後、現代のアラビア語が政治・社会の変容と連関する文法改革や標準的な学校文法の普及によって生成され、またそのようなアラビア語を共通の媒体とすることによって、今日的なアラブ世界が形成されたと総括される。

(論文審査の結果の要旨)

アラビア語圏は、中東地域の中でトルコ語圏、ペルシア語圏と並ぶ独自の文化圏として認知されており、それを「アラブ世界」と呼ぶことが通例となっている。中東地域が 19 世紀まで、オスマン朝、カージャール朝などが支配し、イスラーム的な色彩によって特徴付けられていたことは周知の通りであり、それが近現代の植民地支配や独立闘争によって変容し、民族的な区分によって理解されるようになった。アラビア語圏でも、言語を紐帯とするナショナリズムが勃興し、アラブ世界が生まれたことが自明視されている。

ところが、その過程においてアラビア語がどのように変化したのか、古典的なアラビア語と現代のアラビア語がどのように異なっているのか、その変化が現在見られるような「アラブ世界」の形成とどのような関わりがあるのかといった重要な点については、これまで国際的にもほとんど考察されてこなかった。トルコ語とペルシア語については、現代標準語の生成とネイション・ステートの形成の関係が考究されてきたが、アラビア語については研究上の空白が存在する。確かに、20 カ国以上で広域的に用いられているアラビア語の場合、言語と国家の関係は単純に論じられるものではないが、それにしても、アラビア語に関しては言語の研究と政治・社会の研究は互いに縁遠く、これまで相互性を持たずに来た。本論文は、その空白を埋め、新たな地平を拓く先駆的な貢献をなすものである。

本論文の学術的な貢献は、以下の 3 点にまとめられる。

第一に、19 世紀から 20 世紀にかけて行われたアラビア語の文法改革、学校文法の形成、現代的な正書法の確立、各国のアラビア語アカデミーによる標準化の営為など、現代アラビア語についての貴重な知見とデータを明らかにしたことである。アラビア語文法学は、古典期については国際的に相当な蓄積があるが、近現代についてはほとんど研究がなく、現代アラビア語文法について実証的な考察を大きく進めたことは高く評価される。

第二に、そのような文法の変化を、単に文法上の変化とするのではなく、同時代的な中東の政治・社会の変容と連関させ、識字率の向上、学校教育の普及、民族主義の広がりなどと結びついた変化であったことを明らかにしたことは、大きな意味を持っている。

第三に、臨地研究によって、これまで実態がはっきりしなかった各国のアラビア語アカデミーの活動内容やアカデミーがおこなう規範的な議論がどのように社会的に受容されているかという点について、明らかにしたことは重要である。特に、ハムザの正書法について、カイロのアラビア語アカデミーを舞台とする 60 年代初めの汎アラブ的な決定と 70 年代末のエジプト一国的な決定によって、現在二種類の表記法による地域差が生じていることを実証的に示したことなどは、大きな発見と言えるであろう。

このような成果をあげるにいたった申請者のアラビア語運用能力の高さについては、特筆に値する。地域研究においては地域言語の運用能力は不可欠であるが、申請

者は日常語の水準をはるかに超えて、古典語にも通曉し、アラブ人の文法学者たちからも敬意を表されるほど研鑽を積んでおり、その能力を今後の研究にも大いに発揮することが期待される。

以上のように、本論文は中東地域の重要な一部をなしているアラブ世界およびアラビア語について、これまでにない新しい知見と考察を加えたものであり、中東地域研究において大きな貢献をなすものと高く評価できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 22 年 1 月 21 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。